

駒澤大学図書館と『禅籍目録』

奥野光賢

(一)

本稿は、私を研究代表者とする平成二十四(二〇一二)年度駒澤大学特別研究助成共同研究(共同研究者・永井政之、飯塚大展、岩永正晴、程正)、研究課題「禅宗文献の受容と展開」の成果の一部として草されるものである。われわれの今回の共同研究の最終的な目標は、申請時の計画書に明確に記したように、駒澤大学図書館編『新纂禅籍目録』に続く禅関係文献目録の作成を目指すことにあるが、その予備的作業の一環として、本稿において私は『新纂禅籍目録』の土台となった昭和三(一九二八)年刊行の『禅籍目録』出版に至るまでのいわば裏面史を明らかにしてみたい。

明治十五(一八八二)年十月十五日、麻布日ヶ窪に校舎を新築して、これまでの「曹洞宗専門学本校」から「曹洞宗大
学林専門学本校」と改称した本学は、この日を開校記念日と定め、昨年(二〇一二)十月十五日には慎ましくも厳かに開

校一三〇周年を祝った。また、明治三十八(一九〇五)年、校名を「曹洞宗大学」と改称した本学は、大正二(一九一三)年、現在の地(旧東京府荏原郡駒澤村)に移転しているので、本年は駒沢移転百年の節目にあたっている。

そして、開校八十周年を記念して出版されたのが、『禅籍目録』を改編した『新纂禅籍目録』(一九六二年)である。同目録の刊行によって、駒澤大学図書館は私立大学図書館協会より協会賞を授与されているが、その荣誉は図書館ばかりでなく駒澤大学の歴史に燦然と輝く優れた業績の一つとして長く記憶にとどめられるべきであろう。

ところで、同目録が刊行されてからすでに半世紀の歳月が流れたことになるが、この間の斯学の研究の進展にはめざましいものがあり、その続編の刊行が期待されるところとなっていた。⁽⁴⁾今回、私どもが共同研究を企図した所以でもある。

本学図書館の歴史については、すでに『駒澤大学八十年史』に始まり、以後それぞれの『年史』において、その歴史が概

観されており有益であるが、本稿では近年翻刻紹介された、駒澤大学禅文化歴史博物館大学史資料室による労作、駒大史ブックレット『「図書館誌」にみる駒大図書館史』⁵⁾を主資料に、前述したように特に『禪籍目録』編纂の過程に焦点を絞り、少しく論述を試みることにしたい。

(二)

本学における最初の本格的学校史である『駒澤大学八十年史』の「図書館史」は、次のような叙述で始まっている。長文にわたるが、重要な箇所なので煩を厭わず、関連する全文を示しておく。

わが大学の図書館史に就ては明治三十七年に最初の図書係となった孤峰智璨師は記録の劈頭に左の如く記している。

「本館ハ其ノ初メ梅檀林時代ヨリ宗乘余乘漢文等ノ図書ヲ収集シ専門本校ヨリ曹洞宗大学林ニ至リテ益々其数ヲ増加シ故教頭折居光輪師ノ図書三千百十二冊ノ寄贈ヲ得テ兪々増大シ後更ニ曹洞宗高等学林ノ蔵書ヲ加ヘ亦タ故教頭筒川方外師ノ図書ヲ得テ兪々専門図書館ノ基礎ヲ確立スルニ至レリ於茲乎従来本館ノ管理ハ大学林寮監ノ兼任スル所ナリシヲ明治三十七年九月孤峰智璨始メテ専任図書係ニ任ゼラ

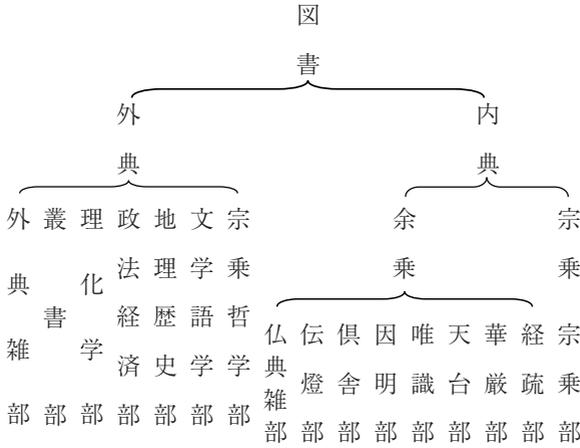
レ遂ニ分類目録イロハ目録カード目録等ノ編製ニ従事シ更ニ図書館建築ヲ企画シ是ヲ十方特志ノ諸賢ニ図リ終ニ其業ヲ円成スルヲ得タリ当時曹洞宗大学学長山腰天鏡学監棟方唯一二氏ノ尽労又タ与テ力アリ否実ニ両氏ノ力ニ依テ今日ノ完成ヲ遂グル事ヲ得タルモノト云フモ過言ニ非ザルベシ然レドモ他職員ノ功勞モ又没スベカラザルモノアリシハ固ヨリ言ヲ俟タザル也若シ夫レ余ノ希望ヲ述ベンカ希クハ閲覧室ヲ新築シ更ニ禅書ヲ中心トシテ他一般ノ図書ヲ収集シ依テ以テ仏教界唯一ノ一大図書館タラシメ宗内僧侶ハ勿論一般ノ読書子ニ公開閲覧ヲ許容セントスルニアリ後來職ニ膺ル者宜シク其ノ心シテ本館ノ發展ニ努力尽瘁セヨ」

明治戊申（四十二）孟春之日 烏石 孤峰智璨誌

この記事は後に詳述されている「大学図書館の新築」とした図書館新築の工を竣えてから、翌春退任に先だつて後日の為に記されたものであり、次で師は図書の分類法や館則を制定し記録されている、当時の図書整理の状況や館況を窺うには何よりの資料と思われるので左に記そう。

「明治三十七年九月分類目録ヲ編成ス 大別シテ内外ノ二典トシ内典ヲ九種トス、即チ宗乘、経疏、華

巖、天台、唯識、因明、俱舍、伝燈、雜等はレナリ、
 外典ハ七種ニ分類ス即チ宗教哲学、文學語学、地理
 歴史、政法經濟、理化学、叢書、雜等はレナリ、表
 示セバ左ノ如シ



内典之部

内宗大 宗乘大本 (美濃紙形)

内經大 經疏部大本

内華大 華嚴部大本

内台大 天台部大本

内唯大 唯識部大本

内因大 因明部大本

内俱大 俱舍部大本

内伝大 伝燈部大本

内雜大 仏典雜部大本

内典小 内典小本 (和装)

内洋大 内典洋装大本 (四六二倍形)

内洋中 内典洋装中本 (菊版形)

内洋小 内典洋装小本 (四六版形以下)

外典之部

外和大 外典外皮和装美濃紙形

外和小 外典全半紙形以下

外洋大 外典洋装四六二倍以上

外洋中 外典洋装菊版形

外典小 外典洋装六版形

同時ニ図書索引ノ便宜上記号ヲ設クルコト左ノ如シ

外欧大Ⅱ欧文四六二倍以上

外欧中Ⅱ欧文菊版形

外欧小Ⅱ欧文四六形以下

続いて『八十年史』は、第二節として、次のように「曹洞宗図書館規則」⁽⁷⁾を載せている。

第一条 本館ヲ曹洞宗大学図書館ト命名ス

第二条 本館ハ之レヲ曹洞宗大学内ニ設置ス

第三条 本館ニハ汎ク内外古今ノ図書ヲ備ヒ専ラ曹洞宗

大学教職員学生ノ研究ニ資シ傍ラ一般研究者ノ便ニ供ス

第四条 本館ノ図書ハ経費ノ許ス限り之レヲ購求シ其ノ

他ハ特志者ノ寄金若クハ寄贈図書ヲ以テ成立ス

第五条 本館ノ開閉ハ一ニ曹洞宗大学ノ授業時間ニ順ス

第六条 本館ノ図書ヲ借覧スル特典ヲ有スルモノ左ノ如シ

曹洞宗大学講師及教職員

同校出身者及現在学生

同校特別関係者

本館ノ特ニ信用スル人

教職員ノ保証紹介ヲ得タル人

第七条 本館ノ図書ヲ借覧セント欲スル者ハ図書閲覧請

求用紙ニ書目等ヲ認メ捺印ノ上係員ニ提出スベ

第八条 本館ノ図書ハ閲覧室ノ設備スルマデ之レヲ貸与

ス

但シ期限ハ講後及ビ教職員ノ外ハ二日間ヲ超ユベカラズ

第九条 本館ノ図書借覧中ニ破損若クハ紛失シタル者ハ

必ズ弁償スベキモノトス

第十条 本館ノ事務ヲ弁ゼン為若干ノ係員ヲ措ク

明治三十七年十一月七日

曹洞宗大学図書館係

（以上、『駒澤大学八十年史』四四九―四五二頁参照）

筆者の管見する限り、『八十年史』、そしてそれを受けて補説された『百年史』、そのいずれでも明記されることはなかつたが、いま長文を引いた前述の箇所を典拠は、今回翻刻された駒大史ブックレット『図書館誌』にみる駒大図書館史⁽⁸⁾を紐解いてみると、実は「図書館誌」であったことが判明する。『八十年史』『百年史』には、明治三十七年九月孤峰智璿が始めて専任の図書係になって以来の歴代の図書係の氏名も列記されているが、これもすべて「図書館誌」に基づいたものであった⁽⁹⁾。

すなわち、『八十年史』は「歴代の図書係」として、次のように記している。再度にわたるが、ここでも全文を引くこ

とを諒とされた^⑩。

明治三十七年九月孤峰智璨師が初めて図書係として専任以来、大正九年三月佐藤泰舜師が辞任される迄には、初代孤峰智璨（明三七、九就任―同四一、二退任）二代多飯道海（明四一、二―同四二、九）三代門脇探玄（明四二、九―同四四、三）四代綾富卓道（明四四、四―同四四、一）五代中幡義堂（大七、一―同三、一〇）六代多羅尾慧輪（大七、一―同五、九）七代小松原国乗（大五、九―同五、九末）八代保坂玉泉（大五、一〇―同七、一）九代佐藤泰舜（大七、二―同九、三）と経過している。長くて二、三年、短い方は一ヶ月を出ないでの頻々たる更迭が行われている。この当時の図書係は他への登竜門の足場になっていた為であろう。

その為どの程度の仕事が行われていたかも判然とせず、二代多飯師から七代小松原師に至る九年間の記録が美濃紙で六枚、保坂、佐藤両氏時代になって稍や詳しいが、大正五年十月以降三月迄の記録が十一枚に過ぎない。初代孤峰氏時代の図書館（実は書庫）建築記事が上記のように詳しく述べられたから、引続いての記事も何とかせねばならぬのだが、肝心の記録は今記した通り極めて微々たるものでどうすることも出来ぬ。大学が駒沢へ移った時の図書係は中幡義堂であり、而して駒沢へ移

後は高田儀光教授が初代館長となられておるが、館の記録にはその就任年月さえ明記されておらぬ。

大正五年九月に至って「高田館長ノ手二依リ注文帳、飯原簿、削除目録等新調サル」と初めてその名が記載されておる。図書館とはいうものの、その資料は斯の如く貧弱で、大正九年四月十代目の図書係となつた小川靈道が先任者佐藤泰舜から引継いだ書類は、図書原簿三冊、寄贈簿、記録各一冊、会計簿（これは佐藤氏時代に調べられたもので雑費記入程度のもの）および前記注文帳、飯原簿、削除目録と称するノート三冊、他に硯箱一ヶと微々たるものであつた。大正九年四月に小川靈道が十代目の図書係になつてから、今日に至るまで四十余年、個人の文庫に僅かに尾毛を添えた位の図書館から、今日の大をなすに至つたものである。（四七一―四七二頁）

引用中、「美濃紙で六枚」「記録が十一枚に過ぎない」とあるのは、「図書館誌」を指しており、この引用文中の記述自体もほぼ同誌に依るものである。

ところで、引文中に「この当時の図書係は他への登竜門の足場になつていた」とあるように、確かにここに記された図書係の氏名を見ると、孤峰智璨^⑫、小松原国乗^⑬、保坂玉泉^⑭、佐藤泰舜^⑮と、のちの本学や曹洞宗門の重責を担つた錚々たる面々が並んでいる。後年、編纂された『孤峰智璨伝』には、次

のような興味深い記述を見出すことができるが、これは前の『八十年史』の「登竜門への足場となっていた」という記述と呼応するものであろう。⁽¹⁶⁾

明治三十七年二十六歳、病中に大学林を卒業し、その病患も七月上旬に全快して帰京した訳であった。それから八月盆を師匠のもとで暮らして、みなに健康恢復のよろこびを言われていた。しばらくは永光寺で送るものと決めていたら、大学林から図書館主事の任命を受けた。これは学究の徒としての資質を、かねて目をつけられていたからであるが、自身としても、かねて欲求してやまない禅宗史研究には、この上ない地位に就ける訳である。願ってもない幸せとしたことであらう。

よって上京を許可されて、勇んで就任した。その職にあつて傍ら和融誌の編集にもあたり、図書館の古書を自在に読みふける日常の楽しさは、後年のあの蘊蓄の根底を固めたものと推測される。

それはともかく、以後の「図書館誌」の記録のみならず、本学図書館の基礎作り、そして『禅籍目録』の編纂にあつて多大の貢献をなしたのが、大正九（一九一九）年四月に第十代図書係として着任し、後には第六代図書館長となつた小川靈道⁽¹⁷⁾であつたことは衆目が一致して認めるところであらう。そして、氏がその生涯を賭して『禅籍目録』を改編、上梓し

たのが『新纂禅籍目録』だったのである。また、同目録に「序」を付したのが、第八代図書係で、『新纂禅籍目録』刊行当時は第十七代総長であつた保坂玉泉であり、同目録刊行に深く関与したのが、長らく図書館運営に携わり、後に第九代図書館長、さらには第二十三代総長を務めた櫻井秀雄⁽¹⁹⁾であつたことも忘れてはならない事実として銘記されるべきである。

(三)

さて、昭和三（一九二八）年三月刊行の『禅籍目録』冒頭の「緒言」において、初代図書館長高田儀光は、その「編纂の動機」「編纂の方針」「編纂の経過」「出版の理由」として、次のように述べている。⁽²¹⁾

編纂の動機

大正二年九月不肖就職するや、本学図書館をして權威ある禅宗研究所たらしめんと企図せり。而も当時蔵書僅少にして図書館の名に添はず、補充せんにも標準とすべき書籍目録なし。茲を以て、本書編纂を企て、禅宗研究に資するものは能ふ限り之を涉獵編録し、当該書誌の蒐集に使せしめんとせり。

編纂の方針

編纂の動機前述の如し。従つて其蒐集の範囲も広汎なり。所謂禅書に限らず、苟も其書名内容にして禅宗研究に資

するものは、古今を論ぜず、真偽良否を択ばず、刊本写本の別を問はず、悉く之を採録せしめたり。これ広義の禅宗研究に資するの日必ず来るべきを信ぜるが為なり。著者名目録、分類目録、並に禅籍解題の編纂は第二期の事業として他日斯学研究者を首肯せしむるの期あるべし。

編纂の経過

計画は大正二年なれども、着手せるは大正八年佐藤泰舜氏図書掛の時に始まる。而も当時は館員僅一名にして、到底事業を進捗するの余裕なく、大正九年小川靈道氏これを継承し、大正十三年佐々木秀幸氏主として之に当り、大正十五年米本堅瑞氏訂正増補之を纏む。小川氏は書名の蒐集編纂に就て其間堪へず両氏を援助せり。

出版の理由

本書に採録せる書名少からざれども、決して是に尽きたるにあらず。遺漏更に倍加するものあるや知るべからず。特に洋書に至りては涉猟充分ならざるの憾あり。これ洋書には禅を主題とせるもの極めて尠く、検索の易からざるに由る。然るに今未定稿の儘出版せし所以は、(一)之れ以上蒐集をなすに要する人員資力の余裕なきこと。(二)公表よつて当該書誌蒐集の手掛りを得易きこと。(三)江湖諸賢の補正を得て本書の完成を促進するに便なること等を認めたるが為にして、此事業完成の手段に

過ぎず。

『禅籍目録』の刊行は、大正十二（一九二三）年の関東大震災によつて壊滅的打撃を受けた旧図書館²²の新築落成に合せてなされたという事情もあつたよう²³で、「出版の理由」に「未定稿の儘」と見えるように、高田館長もこの目録が完全なものとはなつていなかったことは、けつして謙遜ではなく、十分に認識していたと思われる。

ところで、右の「編纂の経過」には、「計画は大正二年なれども、着手せるは大正八年佐藤泰舜氏図書掛の時に始まる」とあるが、この間の事情を「図書館誌」は次のように伝えている。すなわち、大正八（一九一九）年二月五日の条には、

保坂主事ノ後任トシテ、佐藤泰舜師来赴、以下佐藤泰舜記〔その一〕、三七頁）

とあり、また同じく五月二十日の条には、

禅籍総目録作製ニ着手シ、研究生共同事業トナス（同前、三九頁）

と見える。

また、同年七月十八日の条には「宗乗書籍曝書並に分類積換に着手、研究生小川靈道君随喜」（同前）とあるから、小川が前の「研究生共同事業」の一員に含まれていたことは明らかであろう。つまり、小川はその最初期から『禅籍目録』

に関わっていたのである。ちなみに氏の図書係就任はすでに見たように、大正九（一九二〇）年四月のことであり、同月十五日には学内の宿舍に引越し、大正十三（一九二三）年五月に結婚するまで、同宿舍に起居し、ひたすら図書館業務に専念していたことが推知される。続いて「図書館誌」は、次のように伝えている。

◎大正九（一九二〇）年

壹月廿九日

禅籍目録作製ノ具トシテカードケース（六ヶ抽斗）及カード五千枚注文ニ因リテ出来上リ黒沢ヨリ持参（「その一」四一頁）

式月六日

高田館長宗務院ニ出頭、禅籍目録作製ニ付キ宗報誌上広告掲載方ノ交渉ヲナシ、黒沢其ノ他ノ店ニテ事務上用具調査ヲナス（同前）

禅籍カード記入ニ着手ス（同前）

七日

黒沢ヨリカードケースノ抽斗ヘロッドヲ付ケテ送届ク、総代金八十五円七十銭（同前）

禅籍目録作製用紙、注文（同前）

廿七日

宗報及第一義二禅籍収集ノ広告掲載（同前）

十五日

これによれば、大正八年に『禅籍目録』の作成に着手した図書館では、明けて大正九年早々にカードケースおよびカードの調達にかかり、二月七日にはカード記入を開始していることがわかる。一方、高田館長は曹洞宗宗務院に対し、『宗報』ならびに『第一義』に『禅籍目録』作成のための広告文を掲載すべく交渉し、これを実現している。『宗報』および『第一義』に掲載された広告・依頼文は次の通りであった。

禅籍蒐集并目録作製

本学図書館は、今回其の事業として、「禅書の蒐集」と「禅籍目録の作製」とを企てました。之れは価値ある仕事であつて、又当然なさねばならぬ任務と考へます。

併し乍ら、仏教が開けてから三千年、禅宗が栄えてから一千五百年、印度、支那、日本の三国を通じて述作せられた禅宗の書籍は、驚く程多種多量にあるので一朝一夕には其の書目をすら知り尽す事は出来ませぬ。如之版本にならぬ写本、一寺一人に限つた記録類の如きは、殆んど知るに由なき有様であります。

で此の際、各位の御支援を仰ぎ、左記の條項に就いて、一臂の労を賜らん事を御願ひ致します。但し其の中には御願ひばかりでなく、御望に應ずる事柄もあります。自他共々に利して、此の聖業を完ふし度いもので御座います。茲に云ふ禅籍とは、極く範囲を広めて、禅宗に関係

ある一切の書籍を云ふのであります。

一 書籍の寄贈を仰ぎたし
二 本館に所蔵せざる書籍は相当の価格を以て買受け
たし

三 貴重品又は其の他の理由によりて手離し難き書籍
は謄写の便を与へられたし

四 御所蔵に係る書籍の拝覧を許されたし

五 御所蔵の書籍目録を提示されたし

六 古書珍本の所在地を教示されたし

七 古本は相当時価を以て売却の依頼に応ず

八 蔵書整理又は虫干の際は夏季休暇中に限り近傍の
本学々生に御依託の希望に応ず（但し其の際は五
月末日迄に申越されたし）

九 蔵書に関し不明の点は有ゆる質疑に応答す

東京府荏原郡駒澤村 曹洞宗大学図書館

目指すべき『目録』の基本的方向性と意気込みが感じられ、
先人の努力に胸打たれるものがある。

さて、現在残されている「図書館誌」は、歴代の図書係が
記録したものであるが、分量から言っても記載された内容か
らしても、その記述の中心となっていたのが小川靈道であつ
たことは歴然としている。当然のことながら同誌は、業務日
誌という性格の強いものであるから、当時の開館・利用状況^①、

寄贈本の状況^②、図書購入の状況等^③、図書館業務に関わること
が中心になっているが、ところどころに小川個人の心情が吐
露されている箇所もあり、読んでいて興味の尽きないものが
ある。また、内容的にも図書館ばかりでなく、駒澤大学全体
に関わる歴史的記述としてもきわめて貴重な証言が散見され、
「大学史」という観点から見ても重要な資料であると私には
評価される。紙幅の関係で、そのすべてをここに紹介できな
いのは遺憾であるが、以下、私が興味を覚えた「授業料問題」
だけは是非紹介しておきたいと思う。すなわち、大正十（一
九二一）年十一月の条には、次のように見える。

十一月十四日 早朝宗務院訪問、長田予算委員に面会を

求め図書購入費増額二付尽力を乞ふ、折
しも昨日の議会ニ於て第一読会を通過せ
し宗立学校生徒授業料徴収問題の反対運
動につき打合せをなし帰学、早々学長其
他に報告、学生ハ急遽大会を開き、猛烈
なる反対運動を起す、此日新井総持寺貫
首来学、米国巡教談を遊ばさる

十五日 授業料問題につき正式の学生大会開かれ

一同大に激昂殆んど授業なし

廿四日 授業料問題に関する宗務院の最後の回答

来りしも宗務当局ハ八学校並ニ学生生の希望

を容れず、学長以下職員総辞職、学生総退学と決す

廿五日

宗務当局者四名来学、学生の前二弁明大に努めしも学生ハ其後に於て宗務当局者と押し問答数次、大二当局の無誠意を難詰す、於此乎宇野哲人博士・清水講師仲裁斡旋の勞を取らる事となる、是より先学長ハ愈々辞職と決し、洋書廿部二十冊、和漢書参拾五部八十一冊を本館へ寄贈せらる

廿六日

宇野・清水両師の斡旋奏功、十四日以来紛擾中の授業料問題ハ一先づ茲に解決を遂ぐ、高田館長ハ社会事業に関する研究資料廿一部を寄贈せらる。(その一) 七二一七四頁)

図書購入予算については当時から苦勞していたように、「十四日」の記述からはその状況の一端が読み取れるし、一連の記録から当時、授業料問題に関して宗務院当局と学生の間³⁵に深刻な対立が惹起していたことがわかる。この深刻な対立を解決すべく仲裁の勞をとったのが、著名な中国哲学者であり、折しも本学に出講していた宇野哲人³⁶と日蓮学を担当していた清水梁山³⁷であった。しかし、両人がどのような経緯で

仲裁することとなり、どのような斡旋をなし、どのように解決に導いたのかは残念ながらいまのところ知る術がなく、これについては後考を期したいと思う。

(四)

さて、前の「緒言」によれば、小川とともに『禪籍目録』に編纂に深く関与したのは、佐々木秀幸³⁸と米本堅瑞³⁹であったが、「図書館誌」に記された小川の証言に従えば、氏は佐々木に対しては、あまり良い印象は持っていなかったようである。すなわち、大正十二年一月十九日の条には、「館長と圖書新分類二就て意見交換、自説固守するの余り稍や過激なる言葉遣いをなしたるのみか佐々木君とは鎖々たる事より遂二癩癩玉を破裂し大口論をなす、恐縮至極」(その2) 三八頁)と見えるし、『禪籍目録』の編集が進むに連れて、佐々木の仕事ぶりに対する強い不満を漏らしている。佐々木が主任となつて「目録」原稿を一応完成した大正十三年十一月の記事には、次のようにある。⁴⁰

十日

昨日までに禪籍目録追加分のカード補充を終り本日よりは音便による順序変更に着手す、禪籍カード順序変更中偶々反故カードより十四枚の完全なるカードを発見す、之を一々原稿と対照せしに左の驚くべき事項ある事を知る

一、全然重複して不要と認むべきもの四枚あり
二、原稿に尚記入されざる大切なもの三枚あり

三、原稿には記入済なれども保存を要するもの九枚あり

四、更に驚くべき事は原稿には記入済なれど全然カードの見当たらざるもの十行(二)の部七十種中九種までも有る事を発見せり

於此乎音便による順序変更に先ち原稿通りカードの有るや否やを先づ点検するの要生ずるに至る、独逸書と言ひ禅籍と言ひ前任者の乱雑なる取扱に対しては、司書(小川)・米本兩名共呆然たり【その3】三七頁、カッコ内の補い(奥野)

二五日
禅籍目録は原稿に記入済のものにして無カードのもの連日頻々として出で実に閉口す、のみならず書名の取方に就ても疑問視せらるゝもの相生じ新たに其調査も必要となる、例へば仏教全書中、念大休禅師語録の書名を分出するは宜敷も念大休禅師語録中の一々の目次を悉く一書名として掲出しあるが如きは我等の夢想だにせざりし所なり、此の如き事は何等の経験なきもの

と雖も常識的に可否を定め得る事なり、然るに穎才を以て自他共々許す前任者は其分出を以て却て得々たるかに見ゆ、驚き入るの外なし(三九頁)

かかるゆえか保坂が記した『新纂禅籍目録』の「序」には、小川、大久保(米本)の名は記されているものの、佐々木の名は見えなくなるのである。⁽⁴³⁾小川は強い信念の下、右顧左眄しない性格の持ち主だったようで、時には高田館長とも激しく対立することがあったことが記録されている。『禅籍目録』もほぼ完成し、新図書館の落成式を間近に控えた昭和三年(一九二八)年三月二日の条には、次のように見える。

二日 廿九日来二日晚の努力により、禅籍展覧会の準備殆んど完了せしが、他方今津教授、並ニ米本君主となり借入本二より研究室主催の展覧会を企図し館長との間に了解成立、館長よりハ突然予ニ向つて前者を中止し、研究室主催展覧会ニ変更せし旨の報告ありき、予ハ司書として不眠不休の努力を無視せられ、且つ他館員ニ対しても頃日の努力水泡ニ帰し氣の毒に堪へず、遂に館長ニ直言激論す、蓋し予赴任以来始めての出來事なり、無論予も決する所あり【その5】二〇―二二頁)

また、この記事の前後からは、『禅籍目録』の納本と新図書館落成式の準備および新図書館の事務室の位置をめぐって焦慮し、苛立つ小川の姿が読み取れる。

これとは別に、『禅籍目録』編集上の問題に関しても、高田館長と小川には見解の相違があったようで、米本が編集上の相談で森大狂、倉光大愚を訪れた昭和二（一九二七）年二月二十四日の条には、次のような記事がある。

二四日 米本君、森大狂氏方へ再訪、更に倉光大愚氏を

訪ふ、何れも禅籍につき、森氏より日本禅林選

述書目の写本一冊借入、同氏より禅籍目録編纂

上有力なる注意を受け、明治以後のものは拔出

巻末ニ出版史として掲載する事ニ変更しては如

何と館長ニ相談せしも館長の容る、処とならず

（その4）三四頁

この記述によれば、小川は明治以後の刊行物については、正規の『目録』より別出して巻末に出版史として掲載することを提案しているのだが、この提案は高田館長の受け容れるところとはならなかったようである。ちなみに『新纂禅籍目録』では、この時の小川の提案のように改訂されることになるが、それはこの時のやりとりが布石になっているものと見て誤りないであろう。

（五）

さて、いつの世もそうのかも知れないが、出版は企図したものの、ご多分に漏れず『禅籍目録』もその刊行費をめぐってはだいたい苦勞したようである。否、綱渡りの刊行であったといった方がむしろ適切であったといえよう。以下に出版費用をめぐっての図書館と宗務院のやり取りの状況を摘録してみる。

◎大正十五（一九二六）年

七月 九日 午前中館長宗務院へ出頭、館費並ニ禅籍目録出版ニ付了解を得来らる（その4）一

一頁）

一二日 再び司書宗務院へ出頭、先月の支払を受く

ると共ニ禅関係書籍目録出版の申請書提出

（一一―一二頁）

二八日

禅籍目録出版ニ関する回答今尚宗務院より

来らず、本月分館費も不交附、依て館費に

就ては詳細の分類表及参考書持参、宗務院

へ出張、栗木総務ニ面会、了解を仰ぐ、其

際前者ニ対する回答の督促をなす（一二二頁）

禅籍目録出版費不認可の通知を受くと同時

二館長老師の書面を受取り直ちに不認可の旨打電せり

三十日

八月 一日

禅籍出版前后策二就て文化商会を招き鼎生協議の筈なりしが、明二日館長師来館の通知を受けし故明日に延期せり

二日

高田先生態々御出京、協議の結果愈々文化商会をして発行せしむる事ニ決定、契約書を締結す

三日

禅籍目録ハ愈々出版の手筈調ひしも点検するに従ひ誤謬続出頗る困却す

五日

丸ビル精養軒に於ける松浦氏等五氏送別会ニ出席、林哲雄君ニ図書購入費寄贈の謝礼を述べ、其節石原主事の談片中ニ禅籍目録出版費の件場合によりては復活し得るやの口吻ありき(以上、一三頁)

一二日

米本君と協議の上禅籍出版費不認可ニつき其理由を明記し文書を以て御回答ニ預り度旨、館長名義ニて宗務院へ申出づ(一四頁)

九月 九日

禅籍問題につき最後の交渉をなすべく司書宗務院に出頭せしが、予算会議中とかにて部長主事等に面会するを得ず、尚十六日には予算問題其他につき打合せの為大学より関係者夫々出張の筈と承り凡てを保留して帰る(一五—一六頁)

十月二三日

禅学研究資料目録の原稿浄写修了、此日佐藤泰舜氏と同日録出版の件ニ付談合す、尚昨夜も稲村坦元氏と館長との間に同様の談合ありしか(二〇頁)

ここには贅言を要しないほど、図書館側と宗務院の緊迫したやりとりが垣間見られるであろう。ただ、引文中に明らかになように、出版費抛出が不可とされたにもかかわらず、文化商会と出版契約書を交わしているということは、図書館側にもそれなりの決意があったという証であろうか。もちろん、最終的には宗務院も費用を抛出することになるのだが、こうした窮状を決定的に救ったのが、財界から仏教学者に転じ、当時は本学教授であった林屋友次郎⁴⁶であった。すなわち、同年十二月十一日の条には、「館長より林屋友次郎氏へ交渉の結果、禅籍目録出版費二百五十部代を同氏より支出下さる事となる、依て愈々来春ニは出版する事ニ決す」(その4)二六頁)と見える⁴⁷。

ところで、図書館側もいささかでも刊行費を抑えようと努力したのであるうか、最終的な出版元は文化商会に落ち着くことになるのであるが、出版費に関しては小菅刑務所にも照会を行っていることが記録されている。昭和二(一九二七)年一月から二月にかけての条には、次のようにある。

来る旨、刑務所より回答二接す【その4】
三〇頁）

二三日 小菅刑務所へ禪籍出版二付照会（三一頁）

二八日 小菅刑務所より見積到来（同前）

二月一九日 文化商会へ禪籍目録出版二つき新契約をなす、値段は刑務所同様の割合を以てする筈（三四頁）

二三日 小菅刑務所へ断状差出（同前）

すでに見たように文化商会とは大正十五年八月の段階で一度、出版契約を交わしており、本来であれば、そのまま出版するというのが社会的常識というものであるが、再度記すように図書館側には刊行費をいささかでも節約したいという余程切迫した事情があったのであろうか上記のような照会を行っていることは興味深い。いま示した二月十九日の「文化商会へ禪籍目録出版二つき新契約をなす、値段は刑務所同様の割合を以てする筈」という記述はある種の切迫感を伝えてあまりあろう。

このようにしてようやくして出版された『禪籍目録』であったが、これもいつの世の習いなのかも知れないが、刊行後、日を措かずして古書店頭に同目録が並ぶこととなり、小川を慨嘆させることとなる。⁽⁴⁸⁾

（六）

以上、近年翻刻された「図書館誌」の記述を頼りに、私人の観点で『禪籍目録』編纂過程の裏面史をたどってきたが与えられた紙幅の関係もあり、そろそろ収束に向かわなければならぬ。

そもそも今回の私どもの共同研究の出発点は、本稿冒頭にも記したように、『新纂禪籍目録』に続く「禪関係文献目録」の構築を目指すことであつた。そこで、『禪籍目録』『新纂禪籍目録』の抱える若干の問題点を指摘して結びとしたい。

まず最初に、詳しくは指摘しないが、採録文献の基準がかならずしも明確でないことおよび網羅的ではないことがあげられる。次には、文献の所在確認が徹底していない憾みがあることを指摘し得よう。もちろん、これらはいずれも小川らも十分に自覚していたことであつた。そしてまた、これを完遂することは、言うは易く行なうは難いことをわれわれは誰よりもよく承知している。つまりは、言うまでもなく人員の確保とそれを裏付ける予算措置が何よりも増して必要であるということである。これは他ならぬ『禪籍目録』『緒言』が述べていたことでもあつた。

さて、ここで話はやや唐突となるが、『駒澤大学百二十年史』には、「書誌データの週及入力」と題して、次のように述べる箇所がある。

昭和六二年度に、開架図書約二万九、〇〇〇冊の遡及入力を実施した。引き続き、年度計画によって既存開架図書の入力作業を実施することとし進行中である。その中で、本学の特長ある文献群である仏教・禅関係の図書・資料は和漢古典籍が多数を占めている。コンピュータによる漢字処理の安定性を待つことが望ましいとの判断に立って、遡及入力作業を最終段階とすることにした。近年の図書館界では、漢籍データベース形成の共同研究動向もあり、その成果も公表されつつある。本学も漸く平成一二年から、この部門の遡及入力準備作業を開始している。特色ある仏教文献、とりわけ禅文献データベースが完成し、インターネットでの公開によって、内外の斯学研究者に大いに寄与できることを期待したい。(同書、三七一―三七二頁)

『新纂禅籍目録』に続く「目録」を目指す私どもとしては、まずはこの記述にもあるように、図書館の全面的協力を得て、本学図書館所蔵の「禅関係文献」の完全なデータベースを構築することが第一歩であるといえよう(もちろん、その際、どこまでを「禅関係文献」と定義するのかについては慎重な議論がある)。近々、共同研究者と熟議の上、その方向性を決定してゆく。

最後に次のことを特記しておきたい。私どもは今回の特別

研究助成金の交付を受けて、長年、飯塚が中心となって進めてきた『新纂禅籍目録』『同迫補篇』すべての収録文献の入力作業をようやくにして終えることができた。また、その入力文献には同上目録以外に他大学図書館所蔵の文献も若干含まれており、いずれわれわれはさらに文献を追加し、合わせて入力データ情報を見直し、より完全を期してその公開の機会を持ちたいと念願している。しかし、暫定版であることを承知ということであれば、準備が整い次第、希望者にはすでに入力を終えているデータを公開する用意がある。私どもが最終的に願うところは、繰り返し述べるように、何らかの私たちの『新纂禅籍目録』に続く「目録」の作成・刊行であり、その実現に向けて今回着手した計画を微力ながら今後も継続してゆく決意である。しかし、本稿でも見たように、先人もその刊行にあつて何よりも苦労したのはその予算・人的措置の問題であつた。『禅籍目録』出版にあつては林屋友次郎の支援があり、『新纂禅籍目録』の改編・出版の際は、その「序」に明らかなように曹洞宗宗務庁の力強い助成があつた。また、小川個人の図書館人としての四十余年におおぶ献身的努力があつたことも忘れてはならない。われわれの共同研究に平成二十四年度の特別研究助成が与えられたことは感謝に堪えないが、今後も引き続き大学当局をはじめ有縁の方々のご援助をお願いするものである。

稿を終えるにあたって、今回の共同研究の基礎作業に際し、駒澤大学図書館の諸氏よりは種々のご教示を得、またデータの入力・点検に際しては大学院生の永井賢隆、長谷川恵一氏、および岩永（駒ヶ嶺）法子、飯田由紀氏に多大のご助力をいただいた。記して心より感謝申し上げるものである。

注

- (1) 共同研究者の永井政之と程正は、研究成果の一部としてすでにそれぞれ次のような論文を発表している。永井政之「東皐心越と関帝信仰―『覺世真経』と金印の将来―」（駒澤大学仏教学部研究紀要）第七一号、二〇一三年三月、田中良昭・程正「敦煌禅宗文献分類目録―Ⅲ 注抄・偽経論類（1）―」（駒澤大学禅研究所年報）第二四号、二〇一二年二月）。また、本論集中田中良昭・程正「敦煌禅宗文献分類目録―Ⅲ 注抄・偽経論類（2）―」が掲載予定。
- (2) 大学令により大学として正式に認可された本学が、現在の校名「駒澤大学」になったのは大正十四（一九二五）年のことである。
- (3) 昭和三十八年五月二十三日の受賞。協会から授与された賞状は、後注（6）の駒大史ブックレット9『図書館誌』にみる駒大図書館史【その5】（駒澤大学禅文化歴史博物館大学史資料室、二〇〇九年）六頁で写真版を見ることができ。
- (4) 例えば、禅学研究の入門書として名高い田中良昭編『禅学研究入門』（第二版）（大東出版社、二〇〇六年、初版は一九九四年）は、次のように述べる。「最後に文献目録としては、敦煌禅籍に黄永武主編『敦煌遺書最近目録』（新文豊出版公司、一九八六）があり、禅籍全般については、かつて駒澤大学図書館編『禪籍目録』（駒澤大学図書館、一九二八）があったが、後にその全面改訂版として駒澤大学図書館編『新纂禅籍目録』（駒澤大学図書館、一九六二）が出版され、その二年後に追補も出されたが、既に四五余年を経過した今日、この書の続刊乃至は改訂増補版の編纂出版が望まれる」（田中良昭「総説」、同書六頁）

- (5) 『駒澤大学八十年史』（駒澤大学八十年史編纂委員会、一九六二年）第七章「駒澤大学図書館史」、『駒澤大学九十年史』（駒澤大学九十年史編纂委員会、一九七二年）第六章「図書館」、『駒澤大学百年史』（駒澤大学百年史編纂委員会、一九八三年）第三編「駒澤大学図書館史」、『駒澤大学百二十年史』（駒澤大学開校百二十年史編纂委員会、二〇〇三年）第三編第一章「第二章『図書館』参照。このうち、大学史として充実しているのは、最初の大学史である『八十年史』とそれを補訂・加筆した『百年史』である。図書館のみに関して言えば、初期の図書館の歴史は、『八十年史』の記述でほぼ尽きている。以下、本稿でも触れることになる小川霊道、大久保（米本）堅瑞、櫻井秀雄らが編集協力者に名を連ねているので、彼らが中心となって記述したことは疑いない。

(6) 駒大史ブックレット5『図書館誌』にみる駒大図書館史【その1】(駒大史ブックレット10『図書館誌』にみる駒大図書館史【その6】(駒澤大学禅文化歴史博物館大学史資料室、二〇〇六年〜二〇一〇年)。なお、同上『図書館誌』にみる駒大図書館史』は、そのすべてを駒澤大学図書館ホームページ「駒澤大学術機関リポジトリ(旧駒大電子紀要)」で閲覧することができる。また、本稿では上掲書を【その1】等と略称することとする。なお、「図書館誌」の実物は、現在、禅文化歴史博物館に保管されており、私も閲覧する機会を得た。閲覧にあたっては、同博物館学芸員の塚田博、佐藤大樹氏にお世話になった。また、前同博物館学芸員で現在は教務部の丸山哲也係長よりも種々ご教示を得た。記して感謝申し上げたい。

(7) 「図書館誌」では「概則」となっている。

(8) 【その1】一四一―八頁参照。

(9) 【その1】二三頁、二四頁、二五頁、二六頁、二七頁、三七頁、四三頁参照。

(10) 『八十年史』第七章第五節「図書係の頻々たる更迭」四七一―四七二頁、『百年史』下巻、第三編第一章第三節「駒沢移転と大震災」中の「歴代の図書係」項、一五八二―一五八三頁参照。

(11) 「図書館誌」にない記述は、疑いなく『八十年史』の執筆に加わった小川の証言によるものである。

(12) 孤峰智璨(一八七九―一九六七)、総持寺第十八世貫首。簡便

駒澤大学図書館と『禅籍目録』(奥野)

にその人となりを知るには、稲村担元監修『曹洞宗人名辞典』(国書刊行会、一九七七年)が便利である。同辞典九六一―九七頁参照。

(13) 小松原国乗(一八八六―一九六三)、小松原は曹洞宗宗会副議長を務めた。『曹洞宗人名辞典』八六頁参照。

(14) 保坂玉泉(一八八七―一九六四)、第十七代本学総長。『曹洞宗人名辞典』二四二―二四三頁参照。また、保坂については、山内舜雄『続道元禅の近代化過程―忽滑谷快天の禅学とその思想(駒澤大学建学史)』(慶友社、二〇〇九年)一三六―一三七頁参照。

(15) 佐藤泰舜(一八九〇―一九七五)、永平寺七十四世貫首。佐藤の業績については、宮本正尊「佐藤泰舜禅師を偲ぶ」(『印度学仏教学研究』第三卷第二号、一九七五年)参照。また、前注(14) 山内書、一四二頁参照。

(16) 『孤峰智璨伝』第六章「頼岳寺復興から禅修行の経過」(曹洞宗大本山総持寺、一九七三年)五五頁参照。

(17) 小川靈道(一八九〇―一九六五)。小川については、【その4】「図書館誌」を読むまえに(その4)の「図書館誌と小川靈道」(四一―五頁)を参照。なお、駒澤大学内禅学大辞典編纂所編『禅学大辞典』は、特に「小川靈道」「禅籍目録」の項を立てて解説し、その功績を讃えている。いまは『新版禅学大辞典』の頁数を示す。「小川靈道」(二二八頁)、「禅籍目録」(新纂禅籍目

録）（六九三頁）参照。また、前注（14）山内書、一四〇頁を参照。

（18）『駒澤大学八十周年史』第七章「駒澤大学図書館史」第六節「近代図書館への歩み」には、次のようにある。「図書館業務の本質が研究の為の奉仕にある事は勿論であるが、尤も地味な此の仕事が課される為には、心底から奉仕の道念に充ちた人と、資金と技術が必要である。大学図書館が今日を成したものは、かかる意味で、大正九年四月図書館主事就任以来、師跡をつぐことさえ放棄して四十余年の間、文字通り不惜身命の奉仕をした小川靈道を掲げなければなるまい」（四七五頁）。

（19）櫻井秀雄（一九一六―二〇〇〇）の略年譜と業績については、『宗教学論集』第三輯（一九八七年）および『駒澤大学仏教学部論集』第二二号（一九九一年）を参照。それによれば、昭和三十一年四月、仙台の梅檀学園教頭から駒澤大学図書館次長に転じた櫻井は、以後、図書館課長、副館長、総務部長、仏教学部教授、図書館長、教務部長、副学長、総長と本学のあらゆる要職を勤めた。曹洞宗門の役職についても同様である。本学最初の大学史である『八十年史』、『新纂禪籍目録』編集にあつても、重要な役割を果たしたことはそれぞれ藤田俊訓による「跋」、保坂玉泉による「序」に明らかである。『新纂禪籍目録』「追補編」には、「駒澤大学図書館」名の「序」があるが、櫻井名による『新版禪学大辞典』の「新版の序」と同じ「正法眼蔵随聞記」

の一文が引用されている事実から推して、「追補編」の「序」はおそらく櫻井が記したものと推測される。また、櫻井の人となりについては、佐々木宏幹による『現代仏教を知る大事典』（金花舎、一九八〇年、九五三頁）の記事が参考になる。櫻井自身による述懐としては、死の前年に記された、『朝日新聞』一九九九年二月九日付夕刊「こころ、求める前に手放す（自分と出会う）」がある。

（20）高田儀光については、前注（14）山内書、一三五―一三八頁参照。高田館長を語るとき、「駒澤大学図書館の今昔」と題する、次の一文はどうしても見逃せない。長文に亘るが、以下に引用しておくことを許されたい。

「駒澤大学図書館の今昔 館長 高田儀光

駒澤大学図書館は曹洞宗大学林図書室の後身であるが、何時頃から大学林内に図書室が設けられたかは不明である。余が始めて之を知ったのは、明治三十七年曹洞宗大学林を改めて曹洞宗大学と称した頃である。当時麻布日ヶ窪にあった大学林はその初めは宗乗余乗が正科で漢文を補助科とする程度で、講義は大講堂で行なうたものらしい。其後種々の学科が加えられ学級の増すに従つて学級別教室の必要を感じ、講堂の周囲の天井裏に床を張り、壁を抜いて窓を作って教室として使用した。曹洞宗大学と改称して間もなく教室を寄宿舎背後の山上に建てた。是が教室らしい教室の始めて、現在駒沢

の正門を入って右側にある古い校舎がそれである。此の教室の出来た為め元の天井裏の教室の一つを図書室とし一つを閲覧室とした。天井の低い薄暗い部屋で、日置禪師が之を「鼠の巢」と呼ばれたのでも想像が出来る。孤峰智琛師が図書掛をしておったように覚えておる。蔵書には筒川師や折居師の蔵書が寄贈されておったので、可なり良い本もあつたらしいが、何ぶんその数は少なく目録も杜撰で、利用者は極めて少なかった。余は従来の大学林としては図書室の現状に留まるも止むを得ぬかしらぬが、専門学校令に拠る大学としては、も少し図書室を重要視すべきものであると大いに主張した。

当時、現大学長大森禪戒老師が学監であつたが、大森師が退職渡米の後を継いだ棟方唯一学監は亦余と同感で、就職後暫らくして図書館の建築を企てたが宗門当路び同意を得ることが出来ず、遂に広く寄附を募つて建てることにしたが僅かに二千余円の寄附が容易に集らぬ。棟方師は非常に苦心したが寄附は予定額に達せず、遂に自腹を切るまでになった。かくて耐火煉瓦二階建十坪の書庫と、四坪程の閲覧室が校舎の北側に出来上つた。此の書庫は、大正元年に駒沢に移され今の仮講堂の位置にあつたが、大正十二年の大震災の時、大講堂と同様に崩壊した。図書館が日ヶ窪から駒沢に移る時、図書は縄で縛つて荷車で運び、久しく物置に積んであつた。満足な台帳も無かつたので、良書の紛失せるものも少なからず、

欠本が出来、一部屑紙として売られたとの風説も耳にした。

大正二年、余が最初の図書館長に就任し、図書掛一名行者一名と図書の整理と充実に着手した。事務室は六坪、閲覧室が十八坪であつて今の仮講堂の階下である。当時閲覧者が少なかつたので、読者の余暇と蔵書利用の便宜があつたから卒業生中の篤学者が競つて図書掛を希望した。小松原国乗師、保坂玉泉氏、佐藤泰舜師等は何れも曾て図書掛であつた。大正七年十二月、単科大学令の発布せられると同時に、時の学監大森禪戒師は単科大学を目標として着々準備をすすめ、その準備の一として図書の充実を図つた。大正十年衛藤教授が独逸へ留学したその時、マルクの相場が非常に安かつたので盛んに独逸書を購入した。現存哲学方面の独逸書は多くこの時に購入したものである。

単科大学とするには、所蔵図書の数及び図書館の設備が必要条件なので、図書購入費を増額し、大正十四年書庫を建て、昭和三年現在の図書館を建てた。鼠の巢に比すれば大進歩である。併し由来本学の図書館は余り恵まれて居らなかつた。不立文字を標榜して居る為でもあろうか、重雲堂式に「堂のうちにて、たとい禅冊なりとも文字を見るべからず……」とある。禅定は本の中にはないという。如何にも尤もである。併しそれは重雲堂のことである。今は学的研究を標榜して居る大学である。東洋科もある、人文科もある。仏教科にも

禪以外の教学がある、禪と図書とは全く没交渉否な背反するものの如く言う人もある。併し古聖先徳の遺された夥しき禪籍は何を語るか、用い方によっては幾分禪の修業に便あることを認めた上のことではないか。文科大学研究資料の大部分は図書である。

図書館は大学の心臓であるが、不幸にして本学の此の心臓は今や麻痺しかけている。外觀は美でも、その内容は貧弱である。常に学生教職員の不満を耳にする所をみれば余の私見でなく、公論である。大学図書館として誇示出来ない、少くとも他の私立大学図書館に比して大いに遜色がある。その上経営上の困難から栄養不良に陥って居り、学校当局も大いに心配をしているが、如何にも止むを得ざる事情ではあるが決して本学の幸福でなく閑却すべき問題ではない。大学における図書館の重要性を認めぬ人は、閲覧者の少なきことを挙げて其の不要を説く。閲覧者の少なきは蔵書の少ないことが一因であるが、已に蔵書六四〇〇冊に達して居る、諸先生の厚意による依託図書もある。利用の価値がないのではない、寧ろ図書館を理解せず、不案内なるに依るものが多いのではないか。本館が『館報』を発行する趣意は図書館の実状を紹介して、教職員学生の利用を促進し、宗門一般の理解を求め、本館が本学の心臓としての使命を果し得るの日を早うせんが爲めである。

（昭和十年五月二十九日発行『館報』第一号）
 （以上の引用は、『八十年史』四七三―四七五頁によつた）
 (21) 『禪籍目録』一―三頁。なお、【その4】昭和二年十二月二十六日の条の記録によれば（七〇―七二頁）、この「緒言」は米本が草稿を認めたことがわかる。

(22) 関東大震災による旧図書館の壊滅的打撃およびその後の状況について、「図書館誌」は次のように伝えている。以下、【その2】五五頁以下より引用。

九月一日

理事第三四回の誕辰に遭遇し休務中、突如大震

災襲来、其結果大講堂全潰、寄宿舎南・北両棟共大傾斜、図書館書庫また大亀裂を生じ、其他貴賓室も幾分の傾斜をなし、建物全部に涉り壁の墜落せしもの数ふべからず、其惨状言語二絶す、之が為就務始業何れも中絶す

一四日

昨夜の猛雨は書庫四隅の大亀裂より容赦なく侵入し丸濡れとなりしもの夥し、依て行者を督し之を運出乾燥に勤む、此日雲行悪しく時二驟雨到来す

一五日

書庫内の蔵書は何時迄も此俵に放任するを許さず、本日より光山副学監並二滞在中の奏者一同を煩はし大挙図書及び書架を閲覧室に運出す、一方大工をして破損書架の修繕を行はしむ

一六日 作務昨日の如く一同綿の如く疲る。

一七日 激務三日、本日を以て書庫中の図書全部の搬出を了し漸く重荷を下す、之二より第一・第二の閲覧室ハ臨時書庫となる。

一八日 古雑誌、新聞、官報及試験用紙等の反古全部を売却す、眼蔵等の板木を運出、之にて書庫の品は悉く搬出し終る、十五日以来光山副学監・李成春・芳賀・柴田・山岸・吾郷・柳沢・星野・持田の諸君が理事の指揮に従ひ身命を惜まず、我館の為に尽くされし事を深謝す、本日午後館員祇樹朴翁帰学

廿三日 館長来学され諸般の指揮を仰ぐ、過般売却の反古費全部を書庫移転に尽力せし八氏に頒与す

壊滅的建物被害の状況、その後の復旧のための作業、疲労の様子が手にとるよう理解される。やむなく売却した資料の代金のすべてを図書館のために尽力してくれた学生に分配したとある記述には胸打たれる。

(23) 昭和三年三月七日の新図書館（現、耕雲館）落成式当日、来賓に『禅籍目録』・絵葉書・明治以後刊行「禅籍目録」が配布されていることが、【その5】二二頁に見える。

(24) たんなる偶然か、『禅籍目録』刊行前には大谷大学と龍谷大学が相次いで、次のような目録を刊行している。大谷大学図書館

駒澤大学図書館と『禅籍目録』（奥野）

編『大谷大学図書館和漢書分類目録』（一九二五年）、龍谷大学図書館編『龍谷大学和漢書分類目録』（一九二六年）。『禅籍目録』刊行にそうした対抗意識があったと見るのは下種の勘繰りというものであろうか。ちなみに『禅籍目録』編集にあたっては、両目録も参照されていることが『図書館誌』に記録されている。

(25) 前注（9）参照。

(26) 【その1】四三頁

(27) 【その2】四六頁

(28) 『宗報』第五百五拾六号（大正九年二月十五日発行）

(29) 『第一義』第二四卷第参号（大正九年四月号、大正九年四月一日）。なお、「図書館誌」という記事は、掲載されることが決まったというほどの意であつて、実際に掲載されたのは、その奥付に明らかのように『宗報』『第一義』、別々であつたのである。また、細かいことだが、『宗報』掲載の方は「禅籍蒐集」となっているが、『第一義』では「禅籍収集」となっている。

(30) 『宗報』掲載の広告文は、【その1】四二頁にも、その写真版が掲載されている。

(31) 閲覧規程および利用状況については、例えば【その1】五〇—五四頁参照。

(32) 例えば【その1】九月の条に「天界ト地獄一冊、鈴木大拙氏ヨリ寄贈セラル、寄贈簿記入」（二五頁）と記録されているのははじめ、多くの著名な宗学者、仏教学者、および各大学図書館

から寄贈を受けていることが記録されている。その詳細については、後日まとめる機会を持ちたいと思う。なお、『その1』『図書館誌』を読むまえに（その1）は、『図書館誌』に記された図書の寄贈者を詳細に調査することにより、戦前に駒澤大学が果たした社会的役割を明らかにすることができるのではないだろうか」（二三頁）と述べている。

(33) 新刊本はさまざま書店から購入していたようであるが、比較的多かったのは丸善からの購入であったような印象を受けた。古書は当時まだ名古屋にあった其中堂への発注が多かったようである。岸沢惟安（一八六五—一九五五）は本学図書館に寄贈もだいぶなしているが、昭和五年一月九日の条に「其中堂へ注文せし禪籍は殆んど売切、例二より岸沢老師買上げられしとか」【その6】（三〇頁）とあるように、図書館が望んだ禪籍が岸沢に買い上げられた例も多かったようである。ところで、『新纂禪籍目録』「凡例」に「宗門第一の藏書家と云はれた故岸澤惟安本による増訂は、編者の切實なる希望であったが、遂に果たされなかつたのは遺憾である」（三三頁）とあるように、岸沢文庫の全貌の把握は今後の大きな課題であろう。なお、現在、京都市中京区寺町にある其中堂はもととは名古屋市中区門前町にあり、名古屋が本店であったが名古屋空襲で焼失・廃業を余儀なくされ、現在の京都支店のみが残り、今日にいたっている。

(34) 例えば、大正九年十月一日の条には、「図書購入が従前の如く

学監の裁可を経るに非ずんば不可能なりし制度を變更し館長理事会議の上購入し得るに至りしハ稍や便宜となれり、されど本館予算額の幾何なるやを知らず、是を全部本館員二委任されざるハ、尚不便と言ふべし」（その1）（四九頁）と見える。

(35) 私の管見する限り、この問題については、いずれの『大学史』にも触れられていないようである。また、当時の学長は忽滑谷快天であったが、忽滑谷については、前注（14）山内書を参照されたい。なお、この書の「年譜」にもこの授業料問題は取り上げられていない。

(36) 宇野哲人（一八七五—一九七四）。東京帝国大学教授、東方文学学院院長を務めた宇野については、多言を要すまい。

(37) 清水梁山（一八六五—一九二八）。私の研究の関心から言えば、清水は「天親の法華経観」（『大崎学報』第三八号、一九一四年）を、また『法華論』の国訳をなした学者として著名であり（『国訳法華論』『国訳大藏経』論部第二〇巻、国民文庫刊行会、一九二一年）、当然、日蓮宗大学の教授であったと思っていたが、今回改めて清水の年譜を調べてみたところ、意外にも氏は学者としては不遇な人生を送っていたようである。一時、日蓮宗大学の講師となったこともあるが、晩年には本学に招かれて日蓮学を講じた。そうした清水は本学に好意を寄せてくれていたのか、折々に図書を寄贈してくれていたほか、大正十一年三月からは図書購入費として毎月五円を寄贈していたことが記録されている。

る。すなわち、【その2】三月十三日の条に「清水梁山先生より
図書購入費として金五円寄贈せらる、次後毎月同額の寄附をな
し下さると不堪感謝」（一七頁）と見える。

(38) 佐々木秀幸の図書館就任は、大正十一年四月のことであった。
すなわち、「図書館誌」同年四月十一日の条には、次のようにある。
「本月一日卒業されし佐々木秀幸氏本学期より館員として館
務二従事さる、経験ニ富める而して恪勤穎才の名聞ある氏を迎
ふるを得たるハ本館の為賀すべき事なり」（【その2】一八頁）。
退任は、大正十三年三月三十一日だったようで、その日の条に
は、次のように見える。「三十一日 大正十一年三月本学を卒業
すると同時に本館に入り館務を執掌されし佐々木秀幸氏は師寮
寺の都合上本日限り辞任せらる、在任中の勤労を認め宗務院よ
りは退任に際し助教授の辞令を下附されたり」（【その3】一
九頁）。退任に際し、「助教授の辞令を下附」されるということ
は現在では到底考えられないことで、当時の図書館員に対する
処遇を示す事例として参考になる。なお、佐々木は正式な館
員となる前、「行者」として図書館に関わっていたようで、大正
七年四月二十三日の条には、「行者佐々木秀幸辞任」（【その1】
三三頁）と見える。一方、大正十四年十月七日の条には、退任
した佐々木を再起用する動きがあったことが見え、小川は不快
感を示している（【その3】三三頁）。

(39) 大正十二年十一月十日の条に「祇樹君の後任として米本君推

駒澤大学図書館と『禅籍目録』（奥野）

挙」（【その2】五八頁）とあるから、米本の図書館着任はこれ
よりほどなくしてのことであったと思われる。なお、米本は昭
和五年十一月十七日、結婚と同時に「大久保」と改姓している。

同日の条に「米本君本日を以て、前田左門氏長女晴子嬢と結婚し、
同時に大久保と改正す、可賀可祝」（【その6】六五頁）とある。

(40) 『禅籍目録』編集にあたっては、有力寺院に照会をなしたり、
实地調査に赴く等の努力がなされていたことが次のような記述
から窺い知られる。すなわち、大正十三年六月十六日の条には、
「禅籍目録作製に關し嘗て碩徳の住地たりし、旧撰、或は由緒あ
る寺院等禅三派に涉り六拾九ヶ所へ目録作製、送附方の依頼状
を發送す」（【その2】七〇頁）とあり、また刊行間近の昭和二
年三月から五月にかけては、米本が森大狂宅、岩崎文庫（静嘉
堂文庫）、帝国図書館等に向いて禅籍調査をなしているのをし
じめ、京都の各寺院に赴いて实地調査していることが記録され
ている。

(41) 大正十三年十一月五日の条には「佐々木君主任となり調査中
の禅学研究資料目録原稿も略々完了せし」（【その2】七八頁）
とある。この記述はすでに本文中で見た『禅籍目録』「緒言」の
「編纂の経過」にあった「大正十三年佐々木秀幸氏主として之に
当り」に対応しよう。

(42) また、編集が佳境に入った昭和二年十月十日の条には、「文化
商会より八頼に原稿の督促を受くれと、前編輯者佐々木君の尻

拭ひにのみ没頭し原稿を認むること能はず、また夜業の已むなきに至る、今日も館にてハ二人がかりにて五位の部につき再調

【その4】五九一六〇頁とも見える。

(43) 保坂玉泉が記した『新纂禪籍目録』「序」には「初版の禪籍目録は、忽滑谷快天学長高田儀光図書館長時代に、小川靈道図書館係が大久保堅瑞氏との協力によって編纂し、昭和三年二月十五日に上梓したものであります」とあるのみで、ここには佐々木の名前は記されていない。

(44) すなわち、昭和二年二月二十八日の条には「理事会にて本館落成式ハ兪々来月七日と決定せし由、此日米本君、阡陌氏欠勤、館長また不在、余日幾何もなく司書独り焦慮す、先づ山上学監と打合せ、案内状印刷を文化商會に依頼、他方禪籍展覧會の目録浄書を磯貝君に依頼す」【その5】九一二〇頁、三月一日の条には「米本君には禪籍展覧會の準備を、阡陌氏ニハ案内状及其控簿を頼み、予は事務所との打合せ其他の庶務を処理しつ、目録の正誤に没頭、禪籍目録洋書の部を逆二組み、其訂正を命ず為に、六日頃ならでハ納本覚東なすと、文化商會ハ勿論、館としても大迷惑なり、本日も一同午後八時まで勤務、案内状発送、正誤も七百頁余二進み、明日ハ原稿を出し得るまで二達す」(二〇頁)、同七日の条には「事務室移転問題出で、館長は五日の文書注意説を主張せられ、予ハ館員一同の意志を主張し、再び激論となる、此間にありて米本君は稍や館長に左袒せられし

為、予の立場ハ全く窮る」(二二頁)とある。

(45) 昭和二年十月二十五日の条に「電鈴工事費、禪籍目録出版費、漢籍購入費合計式千四百二拾参銭一時に下附せられしと、右の内禪籍目録出版費だけ事務所に預け置き其他を受取る」【その4】六一頁とある。

(46) 林屋友次郎(一九八六一一九五三)の略歴については、『日本仏教人名辞典』(法藏館、一九九二年)六七九頁の記述を参照。これによれば、林屋は大正・昭和時代の実業家、仏教学者で、石川県金沢市の生まれ。慶應義塾大学部理財科を出て、三菱合資会社、東京府農工銀行を経て、一九一五年東京鋼材社長となつてゐる。二六年財界を離れ、仏教研究に専念し、四二年まで本学教授をつとめた。仏教研究は今津洪岳、長井真琴、宇井伯寿、望月信亨らに影響を受けたといわれる。著書『経録の研究』(岩波書店、一九四一年)が有名であるほか、『出三蔵記集』(国訳一切経「史伝部」一)の訳者としても知られる。なお、林屋は本学において、後にいわゆる「林屋騒動」を起こすことになるが、これについては前注(14)山内書、一三〇—一三三頁を参照。また、『禪籍目録』「緒言」には「感謝」として、「本学教授林屋友次郎氏の出版費補助」(三頁)と記されている。

(47) 昭和二年十月十日の条に「林屋教授より禪籍目録出版費として金参百円を寄附せらる」【その4】五九頁とあるのが、「二百五十部代」にあたるのか、これとは別に参百円を寄附したと

いう意なのかは正確にはわからないが、おそらくは前者であったと思われる。

(48) 昭和三年四月八日の条に「禅籍目録早や古本屋に出で三円七十銭の値段を附せり、一同大に驚く、而して其の出所につき古本屋(照会)【その五】三七頁」とある。

(補注) 『新纂禅籍目録』の「凡例」に「本目録では徳川末期迄の所出禅籍と、明治以後のそれとを区別し、前者を第一編とし書名の片仮名順に、後者を第二編とし内容を分つた上、書名の片仮名順に或は成立順に掲げた」(一頁)とあるのは、私から見るとこの時の提案が布石になっているように思われる。

(追記) その他、本稿中では触れ得ず、私が興味をもった記述としては、『禅籍目録』の編集もだいぶ進んだ大正十五(一九二六)年十一月四日の条に「新たニ宗典編纂委員となりし永久君と大久保君と来館、禅籍目録原稿の借覧抄録を申込まる、甚だ面白からざりしも拒絶することも出来ず当方仕事に差支なき範圍に於て之を許可する事とせり」【その4】二二頁)がある。すなわち、のちに宗門の著名な学者となる永久岳水と大久保道舟による編集途中の『禅籍目録』の閲覧・記録の申し込みに対し、小川が不快の念を表していることがわかる。かかる申し込みに対する高田館長の対応は、翌五日の条を見ると「宗典史料編纂委員申込に係る禅籍目録原稿の借覧ニ就ては館長より拒絶せよとの命あり」(同前)というものであった。図書館人としての殺

然とした態度に痛快の念を禁じ得ない。

* 本稿における傍線部はすべて私によるものであり、本文中では一々注記しなかつた。また、本稿では基本的にすべて敬称を省略させていただいた。

(二〇一三年八月一日記)

(再追記) 余白を利用して、次のことを「再追記」しておく。当初、私は池田魯參先生に做つて、本稿を「禅と天台止観」と題し、佐々木憲徳『漢魏六朝禅観發展史論』(ビタカ復刊、一九七八年)等の諸研究を踏まえ、最近私自身が強く魅せられている天台の二十五方便説を中心に、中国仏教史上に展開した禅定の理論と実践の研究史をまとめることによって、特別研究助成報告の責を果たしたいと考えていた。『新纂禅籍目録』には、各種経典やその註疏も採録されているが、それを含め、私には上記の点が同目録には不足していると感じられたためである。しかし、いざ着手してみると自らの力量不足を自覚せざるを得ず、今回は断念するより他なかつた。将来の自分自身の課題という意味を込めてここに記すとともに、今後の方向性を示す研究成果として、池田先生の次の論文のみを指摘しておく。

池田魯參「天台止観から道元禅成立までの瞑想の意義」(『印度学仏教学研究』第五三卷第一号、二〇〇四年)

(二〇一三年八月二十二日記)